

上演1 2026年7月30日（木）1校目 北海道ブロック（北海道） 北海道千歳高等学校 『ぐるぐるランドリー』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 石川県立金沢辰巳丘高等学校 寺西 莉緒菜
--	--

——同じことを繰り返してしまう。それが悪いことであっても。——洗濯機も人間関係も直せるならば一番それがいい。しかし、どちらもそんな簡単な話ではない。この作品からそんなことを考えさせられた。

学校祭の衣装を主人公いちかの幼馴染である、はるたのコインランドリーで洗濯をする場面から物語は始まる。学校祭のクラス発表について納得がいかないいちか。そこに怪我で踊ることができなくなったリヤナが現れる。彼女は父がパキスタン人、母が日本人のダブルである。真面目でクラスの中ではお姫様のような扱いを受けるリヤナに対していちかは嫉妬心を覚える。高校生は決して清らかなものではない。いちかは、韓国留学の推薦の話も学校祭のダンスパフォーマンス内容も、何をしても自分がリヤナに負けてしまうという嫉妬心から彼女に対する苛立ちを抑えられなくなり、ついにその思いを SNS に投稿してしまう。リヤナの状況を何も知らないいちかは無神経に心無い言葉を投稿し続けてしまう。しかし、リヤナのお父さんが外国人であるというだけで日本で差別されてきたという状況を理解すると自分がやってきたことの重大さに気づき、後先考えず今の自分の気持ちを優先し行動してしまったことについて深い後悔と自責の念に狩られるのだった。

討論ではそんな彼女について、衝動的かつ幼稚さが残るとも話されていた。いちかのそのような部分が非常に高校生らしく強く共感できるという意見が多く挙がった。クラスメイトが一人、また一人と離れていく中、はるただけは最後までそばに寄り添ってくれていた。作中ではるたが学校へしばらく行けていないことが判明した。はるた側の事情は詳しく語られなかったが、いちかと似て非なるものを抱えていることが察せられた。そんなはるただからこそ、いちかのそばで寄り添えたのではないかという意見が講評委員から出された。

最後のシーンでリヤナが服の汚れた部分が見えなくなるように花を描こうといった。この行為は自分たちの悪い部分、汚い部分を消すことはできない。だが、より嬉しいこと、良いことで上書きできる。過去は消えないが過去を踏まえていい方向に進めるというメッセージが込められているように感じられた。

物語の象徴とも言えるコインランドリーは、まるで主人公の心の有り様を表しているかのようだった。また、こうした舞台装置のクオリティが非常に高いだけでなく、役者の演技にも胸を打たれた。特に、いちかが洗濯板で衣装を洗うシーンは、言葉がなくとも動きだけで焦りや心に抱えている辛さを表現しており、私たちにもその心の動きが痛いほど伝わってきた。

自分の悪いところは自分が一番よくわかる。でも、自分だけでは治せない。そういった悩みは高校生だけではなく誰しもが抱えるものである。そのような人間誰しも抱える悩みに向き合った作品だった。

